

大学生における生活感情の分析

筑波大学心理学系 落合 良行

An analysis on life-feelings in undergraduates

Yoshiyuki Ochiai (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan*)

The purpose of this study was to analyse the relationship of life-feelings in under-graduates. The study was constructed by study I and II.

In the study I a questionnaire was used to make a list of life-feelings. Thirty feelings were selected as representative feelings.

In the study II 112 undergraduates rated these feelings on a 5-point intensity scale.

The data was analysed. Throughout the factoranalysis nine factors emerged. And these feelings were divided into seven clusters with a cluster analysis. It is better to comprehend psychological states of undergraduates from the aspect of life-feelings by using the result of the cluster analysis than the factor analysis.

Key words: life-feeling, undergraduate, cluster analysis

問 題

青年の心理を理解するには、生活を彩っている感情である「生活感情」面からのアプローチも有効である。青年期の生活感情については、その幾つかの研究が行なわれている。(例えば宮下他 1981, 落合 1982, 1985, 1989)しかし、その多くは、個別の感情についての研究であり、生活感情間の関係に関する研究は、今のところほとんどない。生きている青年は、幾つかの生活感情と一緒に感じていることが多い。したがって、青年の心理を理解するには、多種の生活感情の関係を明かにしていくことが必要である。そこで本研究では、青年特に大学生がよく感じている生活感情を調べ、それらのうち特によく感じられている感情を代表的な生活感情として、その感情間の関係を明らかにすることを試みる。

研究 1

目的

生活感情についての研究は、個別の感情についての研究がいくつが行なわれて来ている。が、生活感

情の関係に関する研究は、今までほとんど行なわれてこなかった。青年が感じやすい感情がどんなものであるかの研究もきちんとされてはきていない。そこで、本研究では、まず、大学生がどんな生活感情を感じているのかを調べ、大学生についての生活感情リストを作ってみることにする。

方法

生活感情の調査であることを冒頭に示した調査を配布し、記述式の調査を無記名で行なった。質問は、次のようなものであった。

「あなたが日頃感じている気持ちを、感情名で表すと、どんな感情になりますか。それを思いつくだけ書いて下さい。その理由を簡単にその後に書いて下さい。」

回答欄は、9 欄設けたが、回答数は無制限であった。

調査時期は、1992年1月であった。

調査対象は、静岡県内の私立大学 1～4年生男子32名、女子50名、および茨城県内の国立大学 1～4年生男子20名、女子21名の合計123名であった。

結果

回答された感情名を整理した。その結果が、Table 1である。この表は、感情名を五十音順に整理したものである。整理の際、各感情に付記してもらった「理由」を参考にして、感情名が異なっているにもかかわらず内容的に見て同じものはまとめて分類・整理した。また、同じ感情名でも、内容的にみて異なる場合には、それぞれ内容的にみて該当する感情として扱った。その結果、89の感情にまとめられた。

なお、各人の回答数は、1～9であり、7つの感情をあげた者が最も多かった。また、各感情をあげた人数を参考までにTable 1に記しておいた。

研究2

目的

研究1で作成された生活感情リストに基づいて、大学生の代表的な生活感情を選定し、新たに調査を行い、これらの生活感情間の関係を解明することを目的とする。

方法

研究1で、大学生が感じている生活感情が挙げられたが、その中で多くの者が挙げた30の感情を、大学生における代表的な生活感情として選び出した。その感情名は、Table 2に示した通りである。

質問紙は、次のようなものであった。まず、調査が青年期の生活感情を調べるものであるという主旨に関する記述があり、学部・学年・年齢・性別の回答欄がある。その後、「あなたは、次の感情を最近どの程度感じていますか」という質問がある。回答は30の感情それぞれについて、「いつも感じている」「たびたび感じている」「時々感じることもある」「ほとんど感じない」「まったく感じない」の5件法で求められた。配点は、5、4・・・1とした。

被調査者は、茨城県と静岡県の大学生112名であった。

以上の方法によって、収集されたデータをクラスター分析(平均距離法)を用いて分析した。その際、それぞれの感情の回答について、「いつも感じている」～「まったく感じない」に、それぞれ5～1点を与え数値化して処理した。

結果と考察

(1)大学生が各感情を感じている程度

代表的な生活感情として選び出された感情を、大学生はどの程度感じているのかを、回答をもとに集計してみた。その結果が、Table 2である。

代表的な生活感情として選ばれた感情の数は、いわゆる「明るい感情」より、「暗い感情」の方が多かった。しかし、感じている程度をまとめたTable 2を見ると、楽しさ、うれしさ、喜び、やる気・意欲などが上位に多く挙がっている。このことからみると、大学生の生活は、「暗い感情」より「明るい感情」に、一般的には色づけられていると考えてよいと思われる。

(2)クラスター分析の結果

クラスター分析の結果をデンドログラムにまとめて表したのが、Fig. 1である。これを見ると、本研究で調べた30の生活感情は、大きく次の2つのクラスターに分かれている。

I. 「うれしさ」から「テストに対する不安」までの11の感情からなるクラスター。

II. 「怒り」から「うらやましさ」までの19の感情からなるクラスター。

この2つのクラスターは、さらに幾つかの感情群に分けられる。Iの11の感情からなるクラスターは、次の2つの感情群に分けられる。

(a) 「いわゆる明るい感情群」(第1群)

「うれしさ」から「やる気」までの7感情からなるいわゆる明るいと言われている感情群である。

(b) 「何かをやろうとしているが、それが成就する以前の追われていて着落かない感情群」(第2群)

「忙しさ・追いまくいられている感じ」から「テストに対する不安」の4感情からなる感情群である。

この(a)(b)両群には、『達成志向性が高い状況での感情』という共通点が見られる。この共通点についての解釈を含んで考えると、第1群、第2群は次のような感情群と言えよう。

(a) 「達成意欲が高く、やった・成就したという状態での感情群」(第1群)

この群は、「うれしさ」「楽しさ」「喜び」「やすらぎ・安心感」「充実感」「満足感」「やる気・意欲」の7感情から成っている。

(b) 「達成意欲はあるものの、まだ達成されていず、追われているようで落ちつかない状態での感情群」(第2群)

この群の中には、「忙しさ・追いまくられている感じ」「あせり・焦燥感」「将来に対する不安」「テストに対する不安」の4つの感情が含まれている。

感情名		男	女	感情名		男	女					
あ	安心感	6	7		楽しい・楽しさ	9	34					
	明るい	1	1		達成感	1	2					
	あせり	8	12		待望	1	0					
	安定感	1	2		脱力感	0	1					
	愛情	2	0		退屈	1	6					
	あきらめ	1	3		墮落	1	0					
	圧迫感	0	2		だらしない	1	0					
	あわたたしさ	0	1		だるい	2	10					
	いらつく	1	2		待望	1	0					
	いらだち・いらだたし	15	14		脱力感	0	1					
い	怒り	5	5	つ	つらさ	3	7					
	忙しさ・追いまくられている	7	10		つまらない	3	17					
	感じ				と	どうにかしたい	1	0				
	いきどおり	1	0			どうしてよいかわからない	1	0				
	いかなあ	1	1			どうでもよい	1	0				
	うっとり	0	3			な	情けなさ	2	2			
	うれしさ	3	12				何かしなくては	1	0			
	うらみ	1	0				何かしたい	0	1			
	羨ましい	1	3				に	逃げだしたい	0	1		
	うるさい	0	2					ねたみ	1	2		
お	落込み	1	0	の				のんびり	1	0		
	驚き	1	0					はつらつ	1	1		
	重苦しさ	2	1		晴れ晴れ			2	0			
	おもしろくない	1	0		は			恥ずかしさ	3	3		
	おもしろさ	0	2					悲そう感	0	1		
	か	悲しい・悲しさ	5			10		ひ	疲労感	3	3	
		解放感	1			1			一人になりたい	0	3	
		感動	3			3			ふ	不自信	2	1
		緊張感	2			1	不安感			24	32	
		希望	1			1	不安は解答数が多かったの					
恐怖感		2	2	で、以下の3種に分けた。各								
厳しさ		1	0	項目をも参照のこと								
期待感		1	2	将来への不安		8	13					
窮屈		1	0	テストに対する不安	10	8						
く		苦しさ	2	3	安	仲間はずれになりそうな不	6			11		
	やることが多い	0	1	安								
	くやし	3	3	不満足感		1	0					
	倦怠感	1	3	プレッシャー		1	2					
	孤立感	1	0	不快感		0	1					
	幸福感	3	5	ほ		ほっとした	1	0				
	孤独感	1	3			ま	迷い	1	1			
	さみしい・さびしさ	7	20				満足感	2	6			
	さわやか	1	0				まちどおしさ	0	1			
	し	幸せになりたい	1				1	む	むなしさ・虚無感	2	5	
使命感		1	0		無気力感		3		3			
成就感		1	0		無力感		1		0			
充実感		6	5		むかつく・むしゃくしゃする		3		7			
嫉妬		1	3		納得がいけない		0		1			
自己嫌悪感		1	3		自分勝手さ		0		1			
す		すがすがしさ	3	3	め		めんどうくさい		0	3		
		寂寥感	1	0		も	もの足りない		0	1		
		せつなさ	1	5			もどかしさ		0	1		
		切迫感	1	0			や		やさしさ	1	2	
	せいせいしない	1	0	やる気・意欲				3	8			
	絶望感	1	0	ゆ				ゆううつ	2	4		
	せわしさ	0	2					愉快	1	2		
	そ	壮快感	1					2	よ	優越感	1	2
		疎外感	0					2		喜び	5	6
		束縛感	0					2		弱さ	1	2
そわそわ		1	0		れ			冷酷さ		1	0	
た		墮落	1			0		わ		劣等感	2	6
		だらしない	1			0				わくわく	1	2
		だるい	2			10						

Table 2 大学生が各感情を感じている程度

順位	項目	生活感情名	平均	分散	性差(男女)
①	25	楽しさ	3.562	0.774	
②	24	うれしさ	3.437	0.889	
③	29	喜び	3.359	0.861	
④	10	将来に対する不安	3.391	1.033	
⑤	13	やる気・意欲	3.328	0.909	>.1
⑥	17	やすらぎ・安心感	3.312	0.774	
⑦	27	テストに対する不安	3.219	1.076	
⑧	2	せつなさ	3.172	0.901	<<
⑨	20	満足感	3.156	0.801	
⑩	28	疲労	3.141	0.941	
⑪	3	充実感	3.125	0.917	
⑫	19	あせり・焦燥感	3.094	1.165	
⑬	14	忙しさ・追いまわられている感じ	3.078	1.059	
⑭	23	だるさ	3.078	1.028	
⑮	5	いらだち・いらだたしさ	3.000	1.054	
⑯	30	憂鬱(ゆううつ)	2.937	0.871	
⑰	21	悲しさ	2.922	0.965	
⑱	9	くやしさ	2.906	0.921	
⑲	15	つまらないという感じ	2.906	1.019	
⑳	16	むなしさ・虚無感	2.906	0.988	
	6	劣等感	2.875	1.062	<
	26	毎日変化がなく退屈だという感じ	2.844	1.171	
	22	うらやましさ	2.812	1.111	<<
	8	怒り	2.766	0.921	
	12	つらさ	2.734	0.930	
	4	自分はひとりだという孤独感	2.609	1.018	
	11	むしゃくしゃする・むかつく	2.609	0.828	
	1	嫉妬	2.578	0.793	.1<
	18	仲間はずれになりそうな不安	2.125	0.882	
	7	ねたみ	2.109	0.893	.1<

性差の欄は、<<は1%で、<は5%で、.1<は10%で有意差があることを示す。
「項目」は、質問紙での項目番号を表す。

残りの19の感情からなるクラスターは、さらに次の2群に大きく分かれている。

- ①『やったという達成感がない状況での感情群』
「怒り」から「毎日変化がなく退屈」までの14感情からなる感情群である。この群の中には、次の3つの感情群が含まれている。

(c)「やろうとすることが達成できずに、そのエネルギーが自己外に向けられ攻撃性に変わっている状況での感情群」(第3群)

「怒り」「くやしさ」「悲しさ」「つらさ」「むしゃくしゃする・むかつく」の5つの感情から成る群である。

(d)「やろうとすることが達成できずに、そのエネルギーが自己内に向けられている感情群」(第4群)

「むなしさ・虚無感」「憂鬱」「いらだち・いらだたしさ」「劣等感」「せつなさ」の5つの感情から成る群。

(e)「達成を志さない倦怠的な感情群」(第5群)

「だるさ」「疲労」「つまらないという感じ」

「毎日変化がなく退屈だという感じ」の4つの感情が含まれている群

②『他人との関係に関心を向けている状況での感情群』

これは、孤独感、不安感、嫉妬、ねたみ、うらやましさを5感情から成る群である。

この群を構成している感情は、今までに上述してきた感情とは、質的に異なるように思われる。すなわち、今までの感情は、まとめれば、達成志向性に関わっている感情であるといえる。ところが、この②で1つの群を成している感情は、人との関係性に関わっている感情といえる。

この群は、次の2つの下位群に分かれている。

(f)「一人になることの不安」(第6群)

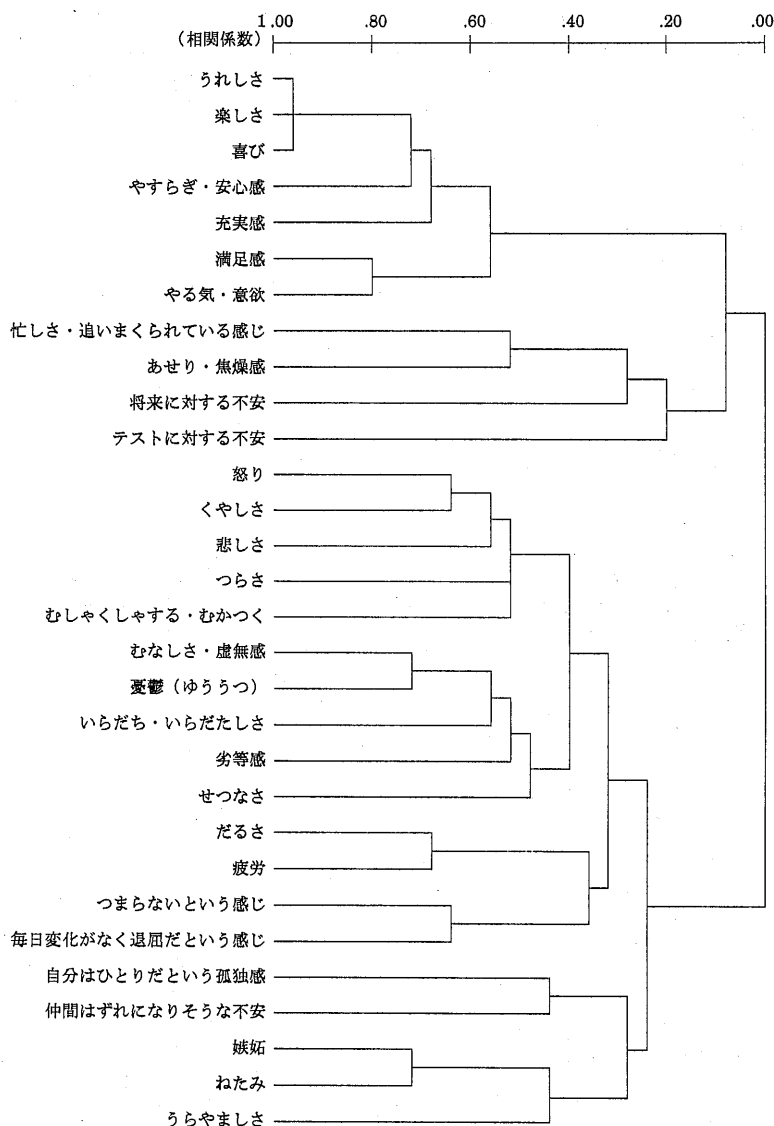


Fig. 1. 大学生の代表的な生活感情30のクラスター分析

この群は、「自分はひとりだという孤独感」と「仲間はずれになりそうな不安」の2感情から成っている。

(g) 「人に対する羨望」(第7群)

この群は、「嫉妬」「ねたみ」「うらやましさ」の3感情から成り立っている。

(3) 因子分析の結果

なお、30感情について因子分析もしてみた。計算方法は、5件法の調査結果を基にして主因子解により因子分析を行い、固有値1.0以上の9因子について、

varimax法による直交回転を行なった。その結果は、Table 3に示す通りであった。寄与率は、71.6%であった。因子の解釈は、0.45以上の因子負荷量を基準にして、次のようにされた。その結果は、クラスター分析の結果とほぼ一致していたが、多少の違いもみられた。そこで、各因子の解釈名の後の()内にクラスター分析の群名を記号で付記しておく。

第1因子 喜び・楽しさ因子 (a)

第2因子 充実感-退屈感因子(d, e)

第3因子 羨望因子 (g)

Table 3 大学生の代表的な生活感情に関する因子分析

	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8	F9
うれしさ	.92	-.12	-.03	-.00	.04	-.08	-.02	-.02	.06
喜び	.87	-.12	.01	-.07	.10	.01	-.06	-.00	.05
楽しさ	.82	-.20	.01	-.07	-.01	-.09	-.04	-.11	.04
満足感	.54	-.48	-.04	-.04	-.07	.02	.11	-.03	.53
つまらないという感じ	-.26	.63	-.01	.30	.07	.17	.22	.11	.01
充実感	.43	-.62	.11	-.24	-.03	.09	.03	-.05	.16
変化なく退屈	-.05	.61	.12	.01	.11	.10	.14	.05	.01
むなしさ・虚無感	-.18	.52	.11	.26	.16	.27	.09	.37	-.08
やる気	.27	-.49	-.14	.15	.11	.11	-.13	.08	.13
ねたみ	-.06	.06	.78	.12	.02	.16	-.02	.15	-.02
嫉妬	.05	-.05	.72	.22	.10	.03	.04	.13	-.08
うらやましさ	.11	.28	.59	-.04	.27	.08	.01	.11	.34
劣等感	-.03	.20	.49	.19	.28	.34	.08	.17	-.08
怒り	.06	.08	.08	.70	.04	.15	.07	.12	.00
くさしさ	-.14	.10	.23	.66	.28	.24	.02	.07	.08
むしゃくしゃ・むかつく	-.12	.11	.21	.55	-.01	-.04	.38	.15	-.19
いらだち	-.12	.10	.33	.42	.33	.17	.29	.17	-.32
あせり	-.03	.09	.25	.10	.76	.07	.05	.20	.02
忙しさ	.03	-.20	.01	.11	.60	.05	.37	.20	-.04
将来に対する不安	-.07	.08	.01	.26	.43	.37	-.05	.03	-.12
テスト不安	.14	.10	.08	-.01	.48	.02	.14	-.11	.00
ゆううつ	-.07	.27	.26	.21	.35	.28	.17	.34	-.21
孤独感	-.10	.06	.17	.17	.05	.73	.09	.22	-.07
仲間はずれになりそうな不安	-.05	.02	.05	.10	.13	.41	.20	-.05	.01
だるさ	-.07	.40	-.01	.04	.13	.04	.69	.06	-.03
疲労	-.01	.08	.04	.14	.23	.15	.61	.07	.01
せつなさ	-.08	.20	.08	.11	.07	.12	.04	.61	-.24
悲しさ	.01	.03	.20	.30	.11	.32	.14	.50	.16
つらさ	-.23	-.03	.20	.38	.25	.00	.12	.45	.01
安心感	.46	-.13	.00	.01	-.08	-.20	-.10	-.12	.52

第4因子 くやしさ・怒り因子(c)

第5因子 焦燥感因子 (b)

第6因子 孤独感因子 (f)

第7因子 疲労感因子 (e)

第8因子 せつなさ因子 (c, d)

第9因子 安堵感因子 (a)

この中で、第9因子は、安心感と満足感が代表的な感情であった。そのうち、満足感は第1因子にも負荷量が高く、第9因子は第1因子にかなり類似した因子とも言えるように思われる。

(4)生活感情から見た大学生の心理と研究の今後の課題

結果の(1)の「大学生が各感情を感じている程度」と(2)の「クラスター分析の結果」、(3)「因子分析の結果」を合わせて、大学生の心理状態を考察すると、次のように言えよう。

まず、感情のクラスター分析と因子分析の結果を

比較してみると、クラスター分析の結果に比べ、因子分析の結果の方が感情の分析は、きれいなまとまりになっていると言えよう。生活感情の単なる分析であれば、因子分析の結果を重視するのが良いであろう。しかし、大学生の心理状態を感情分析を通してみようとする場合には、結果の解釈・命名からみて、クラスター分析の方が優れていると言える。そこで、ここでは、結果の(1)と(2)を中心に述べることにする。

一般的な生活感情の研究は、多くはないが、いくつか発表されている(寺崎他 1992, 内田 1990)。その中では、「感情は、明るい肯定的な評価を与えられている感情と、暗いと否定的な評価を受ける感情の2群に分かれる」といわれている。本研究でも、明るい肯定的な評価を与えられる感情群と、暗いと否定的な評価を受ける感情群は見られた。しかし、この2群に分かれるのではなく、明るい肯定的な評価をされる感情群は、「達成意欲はあるものの、達

成されていず、追われているようで落ちつかない状態での感情群と1つの群を成していた。この結果は、「感情一般の分析をした研究」と「大学生の感情を分析した本研究」との、研究のねらいの違いによるものと考えられる。つまり、大学生の心理を、その生活を彩っている感情から理解していこうとするのと、生活から切り離された感情についての分析研究の違いによると考えられる。本研究のクラスター分析の結果から読み取れるように、大学生には、達成志向性が生活全般にみられる。「うれしい」「たのしい」「充実感」「満足感」等のいわゆる明るい肯定的な評価を与えられる感情も、大学生の場合には、この達成志向性の実現と関連して感じられるのではないだろうか。しかし、決定的な結論を出すには、本研究のような生活感情に関する研究を、重ねた上の方が望ましいであろう。したがって、大学生、高校生あるいは何らかの生活状態が限定された生活感情の分析を、今後さらに研究することが必要であろう。

要 約

本研究では、大学生の生活感情についての調査研究を行なった。まず、研究1で、大学生が感じている感情の収集を行い、感情リストを作成した。次に研究2として、作成された感情リストをもとに、大学生が感じている頻度を基準にして、大学生の代表的な生活感情として30の感情を選定した。この30の感情について、改めて調査を行った。回答は5件法で、各感情を感じる程度が調べられた。このデータについて、クラスター分析と因子分析が行なわれた。クラスター分析の結果は、いくつかのクラスターが

階層を構成しているが、基本的に次の7つのクラスターに分類された。(a)達成意欲が高く、成就感のある状態での感情、(b)追われているようで落ちつかない状態での感情、(c)達成意欲が実現できず、そのエネルギーが自己外への攻撃に変わっている状態での感情、(d)達成意欲が実現できず、そのエネルギーが自己内に向けられている感情、(e)達成を志さない倦怠的な感情、(f)一人になることの不安、(g)人に対する羨望。また、因子分析の結果、有意な因子として抽出された因子は、9であった。その因子は、次のように命名された。①喜び・楽しさ因子、②充実感-退屈感因子、③羨望因子、④くやしき・怒り因子、⑤焦燥感因子、⑥孤独感因子、⑦疲労感因子、⑧せつなさ因子、⑨安堵感因子。

文 献

- 宮下一博・小林利宣 1981 青年期における疎外感の発達と適応の関係 教育心理学研究 29, 297-305
- 落合良行 1982 孤独感の内包的構造に関する仮説 教育心理学研究 30, 233-238
- 落合良行 1985 青年期における孤独感を中心とした生活感情の関連構造 教育心理学研究 33, 70-75
- 落合良行 1989 青年期における孤独感の構造 風間書房
- 寺崎正治・岸本陽一・古賀愛人 1992 多面的感情尺度の作成 心理学研究 62, 350-356
- 内田圭子 1990 青年の生活感情に関する一研究 教育心理学研究 38, 117-125

-1992.9.30受稿-